

< 学術論文 >

「いっぱい」の運用特徴

—— 「だらけ／まみれ／ずくめ」と比較して ——

代 小 艶

東亜大学 総合学術研究科 人間科学専攻
中国 咸陽師範学院
daishouen@hotmail.com

《要 旨》

「だらけ／まみれ／ずくめ」は、中上級段階の類義表現として教えられている。また、日本語能力試験においてもよく出題される形式でもある。しかし、「だらけ／まみれ／ずくめ」をめぐっては、しばしば日本語学習者による誤用が観察され、その使い分けは容易ではないことが窺える。

本稿では、そのような現状を打開する手立ての一つとして、より基本的かつ初級レベルにおいて導入される形式である「いっぱい」を軸とした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入の提案を目指し、その前段階として、コーパスデータを利用して「いっぱい」の運用実態を分析し、「だらけ／まみれ／ずくめ」の運用実態との比較を行った。その結果、以下の3点を明らかにした。

- ① 「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との関係性について、「だらけ／まみれ／ずくめ」とは「いっぱい」の有する多様な文型のうちの一部と重なり、それは「がいっぱい」の場合と「でいっぱい」の場合である。
- ② 「がいっぱい」と「でいっぱい」の後方に共起する表現に関しては、「～になる」や「～のN」という表現が後続しやすい点で「だらけ／まみれ／ずくめ」と共通する。
- ③ 「評価性」に関しては、「だらけ／まみれ」が主としてマイナス評価、「ずくめ」は中立的評価を表す場合に偏るのに対して、「がいっぱい」と「でいっぱい」に関してはプラス・マイナス・中立的のいずれの評価を表す名詞とも共起可能な点で汎用性が高い。

この結果は、「がいっぱい」及び「でいっぱい」を軸として「だらけ／まみれ／ずくめ」を導入できる可能性があることを示すものである。

キーワード：様態表現, いっぱい, だらけ, まみれ, ずくめ

《目 次》

1. 問題の所在
2. 先行研究
 - 2.1 「だらけ／まみれ／ずくめ」との関係性
 - 2.2 太田（2017）における分析の着眼点
 - 2.3 課題の導出
3. 「だらけ／まみれ／ずくめ」の軸となりうる「いっぱい」の文型
4. 「がいっぱい」の分析
 - 4.1 「がいっぱい」の用法
 - 4.2 「がいっぱい」に前接する語の評価性

- 4.3 ここまでのまとめ
5. 「でいっぱい」の分析
 - 5.1 「でいっぱい」の用法
 - 5.2 「でいっぱい」に前接する語の評価性
 - 5.3 ここまでのまとめ
6. 「が／でいっぱい」の後方に共起する表現の傾向
7. 「が／でいっぱい」の分析
8. 「が／でいっぱいの」の分析
9. 考察
10. まとめと今後の課題

1. 問題の所在

「だらけ／まみれ／ずくめ」は、中上級段階の類義表現として教えられている。また、日本語能力試験においてもよく出題される形式でもある。しかし、「だらけ／まみれ／ずくめ」をめぐっては、しばしば日本語学習者による誤用が観察され、その使い分けは容易ではないことが窺える。たとえば、次の例をご覧ください（「？」は日本語として不自然であることを表す）。

- (1) a. ?あの人は欠点まみれだ。(中国人日本語学習者 筆者収集)
b. 那个人(身上) 满是缺点。
c. あの人は欠点だらけ／{が／で} いっぱいだ。
- (2) a. ?宿題には間違いずくめだと先生に指摘された。(中国人日本語学習者 筆者収集)
b. 老师说我的作业里满是错误。
c. 宿題は間違いだらけ／{が／で} いっぱいだと先生に指摘された。
- (3) a. ?教師の日には、机の上に花だらけで、とてもきれいです。
(中国人日本語学習者 筆者収集)
b. 教师节的时候，桌子上满是鲜花，好漂亮。
c. 教師の日には、机の上に花 {が／で} いっぱいで、とてもきれいです。

(1a)～(3a)は、中国語を母語とする日本語学習者の誤用例である。これらの誤用が生じる原因は、(1b)～(3b)を見てわかるように、「だらけ／まみれ／ずくめ」が共に中国語の「满是」と対応していることに起因するものと考えられる。つまり、中国語話者において、「だらけ／まみれ／ずくめ」の使い分けを考えるにあたっては母語を手掛かりとしてその使い分けを教えることはできないことが窺える。そのため、別の方策を考えなければならない。

その一つの手立てとして日本語のルールとして教える方法がある。しかし、「だらけ／まみれ／ずくめ」については、意味的な側面はもちろんのこと、運用実態としても類似している点が多く、「だらけ／まみれ／ずくめ」の3つの形式だけで運用説明を完結させることは難しい。そのため、「だらけ／まみれ／ずくめ」の中で重みづけを変え、導入する順序などを工夫する必要が出てくるが、それと同時に、類義表現の導入に関しては、より基本的・汎用的な形式との関連性を指摘しな

から導入を図ることも重要である。

以上を踏まえ、本稿ではより基本的かつ初級レベルにおいて導入される形式である「いっぱい」を軸とした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入の提案を行いたい。事実、上記の(1c)～(3c)に示したように、「だらけ／まみれ／ずくめ」の各々は格助詞+「いっぱい」という表現で置き換え可能であり、かつ、日本語として自然な文として成立している。しかしながら、「いっぱい」を軸として「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入が可能となるためには、「いっぱい」が「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも汎用性が高く、かつ、共通する用法を有している必要がある。

そこで、本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用い、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」において運用実態の比較を行い、その共通点及び相違点を明らかにすることを目的として議論を進める。

2. 先行研究

この節では、①「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との間に関連性が見られることを確認し(2.1節)、②「だらけ／まみれ／ずくめ」を量的に分析した太田(2017)の分析手法を紹介し(2.2節)、課題を導出する(2.3節)。

2.1 「だらけ／まみれ／ずくめ」との関連性

まず、「いっぱい」が「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも先立って導入される表現であることを確認しておく。次の表1は『日本語能力試験出題基準(改訂版)』及び日本語読解学習支援システム『リーディング・チュウ太』からの情報をまとめたものである。

表1 考察対象の旧日本語能力試験出題基準レベル及び難易度

考察対象	旧日本語能力試験出題基準レベル	単語レベルと難易度 (リーディング・チュウ太)
いっぱい	3級	★ とてもやさしい
だらけ	3級	★★★★★ 難しい
まみれ	1級	★★★★★ 難しい
ずくめ	1級	★★★★★ 難しい

(出所) 『日本語能力試験出題基準 改訂版』及び『リーディング・チュウ太』のデータより筆者作成。

表1が示しているように、「いっぱい」は「だらけ／まみれ／ずくめ」より先に導入され、難易度も低い表現であることが分かる。

次に、先行研究において、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」の関係性について直接的に言及したものは見られない。しかしながら、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との間に意味的な関係性を認めている記述は数多く見られる。

たとえば、グループ・ジャマシイ(1998, p.213)は、「だらけ」を「それでいっぱいで、そればかりがたくさん^(注1)ある様子」(下線部は筆者による)と記述し、その評価性についても「…でいっぱい」と違い話し手のマイナスの評価を表すことが多い」(下線部は筆者による)と指摘している点で示唆的である。

また、『日本国語大辞典』において、「だらけ」は「そのものがいっぱいであるさま」(日本大辞典刊行会(編)1976, 13巻, p.213, 下線部は筆者による)と解説しており、「いっぱい」がメタ言語として用いられていることが分かる。なお、同様の記述は、『大辞林』(松村明(編)2006),

ならびに、『国語大辞典』（小学館（編）1981）などの一般的な辞書類からも確認できる。

さらに、日中対照辞典において確認した内容からも「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との意味的関連性が示唆される。

表2 日中対照辞典における考察対象の記述

辞書 考察対象	『日中辞典』（初版）	『現代日中辞典』（改訂版）
いっぱい	①満ちている。満，充滿。 会場～の人／擠満会場の人。 ②ぜんぶ。全，占満，全都（用上）。	電車は客で～だ／电车上挤满了人。
だらけ	①いっぱいある。満，浄，全。まちがい～の作文／満篇错误的作文。 ②まみれる。沾満。血～の手／沾满血的手。	ほこり～の本／满是尘土的书。 全身どろ～／全身（一身）是泥。
まみれ	沾汚，沾満。 血～になる／沾满鲜血；浑身是血。	彼らはみんな全身どろ～だ／他们都是浑身泥显的。
ずくめ	完全是……，浄是……。 うれしいこと～の1か月でした。／一个月里浄是令人高兴的事。	上から下まで黒～の服装をしている／从上到下全身穿着黑色的衣服。

（出所）日中対照辞典の記述に基づき筆者作成。

表2において、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」は中国語の「満，全」という語が用いられていることからわかるように、「満ちている」「すべて」の意で共通しており、意味上の関連性が窺える。

以上、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との関連性について、文型辞典と辞書類の記述を確認した。その結果、主に「だらけ」を説明する際に、「いっぱい」がメタ言語として出現していること、及び、日中対照辞典において、「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」に対応する表現が共通することを確認した。

2.2 太田（2017）における分析の着眼点

「だらけ／まみれ／ずくめ」について記述した先行研究は、グループ・ジャマシイ（1998, p.213）、庵他（2001, p.537）、岡本・氏原（2008, p.296）、友松他（2010, p.110）など、枚挙に暇がない。しかし、ここでは、コーパスデータを用い「だらけ／まみれ／ずくめ」の運用実態について量的な観点から言及を行っている太田（2017）の記述を紹介する。なお、太田（2017）の具体的なデータに関しては5節以降で比較対象として紹介するため、ここでは割愛し概要を述べるにとどめたい。

太田（2017）は、「だらけ／まみれ／ずくめ」を「様子・状態」を表す類義表現として取り上げ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて、①各表現の使用傾向、②使用文脈、③構文的特徴の3点について包括的に記述している。

太田（2017）の分析手法として注目されるのは、「だらけ／まみれ／ずくめ」に前接する名詞、及び、後接する表現に注目して量的に記述している点である。

分析の結果、各表現の特徴として、①「だらけ」は「さまざまな名詞につき」、基本的には好ま

しくない状態に用いられる、②「まみれ」は、液体や粉状のような「典型的な名詞に限られている」こと、③「ずくめ」は「プラスマイナス評価は中立」であると、それぞれの特徴について振舞いが異なっていると指摘している。

2.3 課題の導出

ここで、「だらけ／まみれ／ずくめ」における太田（2017）の分析の観点をまとめておくと次の3点が挙げられる。

- ① 前接する名詞、及び、後接する表現はどのような特徴を持つのか。
- ② 前接する名詞はどのような名詞が多いのか。
- ③ 前接する名詞にプラス、マイナス、中立的といった評価性に偏りはあるのか。

以下、上記の3つの観点について検討する。

まず、①について、前方に共起する名詞に着目する点については、従来の先行研究が「だらけ／まみれ／ずくめ」と共起する名詞の特徴について言及してきたことを踏まえてのものであると考えられる。一方で、後方に共起する表現に着眼する点については、「だらけ／まみれ／ずくめ」が、文の述部に用いられやすいのか、あるいは、述部以外に用いられやすいのかという文中における出現位置に着目していると言える。

以上を踏まえると「いっぱい」においても前方に共起する名詞と後方に共起する表現に着目することは、これまでの先行研究における着眼点が踏まえられており、かつ、太田（2017）におけるデータと比較を行う上で有用であると考えられるため、この手法を採用する。

次に、②の観点については、太田（2017）では出現頻度の高い上位8種の名詞の特徴を取り上げながら記述している。一方で、岡本・氏原（2008, p.296）のように、「Aだらけ」は、ある空間や範囲の中でAが目立って多いこと」（下線部は筆者による）、「Aまみれ」は、ある物体がかなりの部分Aで覆われていること」（下線部は筆者による）と記述されていることから分かるように、「空間（＝ある空間や範囲）」や「対象（＝ある物体）」のような名詞の特徴に注目して記述されている場合も見られる。

この点について、本稿では「いっぱい」が「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも汎用性の高い表現か否かを確認するためには、共起率の高い上位の名詞の特徴のみを抽出するよりも、岡本・氏原（2008）のように、〈対象〉や〈空間〉のようなより抽象化した名詞の特徴に着目し、〈空間〉と〈対象〉のどちらの場合が多いのかを量的に分析した方が有用であると考えられる。そのため、「いっぱい」に前接する名詞は〈空間〉を表すのか、それとも〈対象〉を表すのかという観点で分析を行う。ただし、分析にあたっては、〈空間〉と〈対象〉をそれぞれ以下のように定義する。

- (4) 〈空間〉：ある事物（具体的・抽象的なものを含む）が存在、あるいは、発生する一定の場所や範囲（期間のような時間的範囲も含む）を指す。
- (5) 〈対象〉：一定の場所や範囲（期間のような時間的範囲も含む）に存在、あるいは、発生する事物（具体的・抽象的なものを含む）を指す。

ここでの〈空間〉と〈対象〉はセット概念である。具体的には、〈空間〉が問題になる場合には、〈対象〉が前提として存在し、また、〈対象〉が問題になる場合には〈空間〉が前提として存在する関係を成している。

なお、語の特徴の分析に関わる部分であるが、収集したデータを分析した際、「いっぱい」と共

に出現する名詞が〈空間〉であるか、あるいは〈対象〉であるかについては、その名詞のみで判断できなかった。そのため、本稿では文脈情報をもとにその名詞が〈空間〉を表しているのか、あるいは〈対象〉を表しているのかを決定した。そして、文脈情報を用いて判定して〈空間〉と〈対象〉のどちらにも対応しない場合には、分析対象から除外した^(注2, 注3)。

最後に③についてであるが、プラスかマイナスかといった評価性も従来の先行研究にならったものであると考えられる。ここで、先行研究における「だらけ／まみれ／ずくめ」の評価性を表3にまとめる。

表3 先行研究における「だらけ／まみれ／ずくめ」の評価性に関する記述

考察対象	評価性	グループ・ジャマシイ (1998)	庵・高梨・中西・山田 (2001)	岡本・氏原 (2008)	友松・宮本・和栗 (2010)	太田 (2017)	辛 (2012)	趙・劉 (2012)	瀧 (2004)
だらけ	プラス	/	×	×	△	×	△	△	△
	マイナス	○	○	○	○	○	○	○	○
まみれ	プラス	/	/	△	△	/	/	△	△
	マイナス	○	/	○	○	/	/	○	○
ずくめ	プラス	/	中立的	/	○	中立的	○	/	○
	マイナス	/		/	△		△	/	△

(注) ○：容認度が高い △：容認度が低い ×：容認できない /：記載なし
(出所) 先行研究の記述に基づき筆者作成。

表3が示しているように、「だらけ」は基本的にマイナス評価を伴って使われる点で、先行研究の見解はほぼ一致している。また、「まみれ」についても岡本・氏原 (2008, p.296) において「汚いものが、全体を覆うようにくっついている様子」や「好ましくない〜がついている様子」を表すと記述されており、基本的にマイナス評価を伴って使われる傾向がある。そして、「ずくめ」の評価性に関しては、太田 (2017) はコーパスデータを用いて検証した上で、中立的であると指摘し、また、庵ほか (2001, p.538) も「良し悪しに関しては中立的」と太田 (2017) と一致した記述が確認される。

その一方で、「いっぱい」の評価性を巡っては、グループ・ジャマシイ (1998, p.213) の「だらけ」の記述において「... でいっぱい」と違い話し手のマイナスの評価を表すことが多い」との指摘にあるように、「だらけ」のマイナスの評価性が記述される際に、「いっぱい」が非マイナス評価（プラス評価や中立的評価）の表現として挙げられており注目に値する。このことから、「いっぱい」はプラス評価や中立的評価を担う表現であることが示唆される。それに加えて、「いっぱい」という形式の汎用性を図る上でも前方に共起する名詞の評価性を検討することは有益であると考えられる。

以上を踏まえ、本稿でも「いっぱい」の運用特徴を解明する際に、その前方に来る表現の評価性も分析の観点として取り入れ、「だらけ／まみれ／ずくめ」と比較しながら考察を行う。

なお、本稿では、考察対象と共起する名詞の評価性については太田 (2017) に倣い、語のレベル

で判定した。以下は具体的な分類の基準である。

- (6)「プラス（評価）」：話し手にとって望ましい、好ましいもの。
- (7)「マイナス（評価）」：話し手にとって望ましくない、好ましくないもの。
- (8)「中立的（評価）」：名詞からプラスまたはマイナスが判断できないもの。

以上を踏まえ、本稿はコーパスデータに基づき、「いっぱい」を軸にした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入が可能であるか否かを明らかにするために「いっぱい」の運用特徴の解明を試みる。そして、太田（2017）における「だらけ／まみれ／ずくめ」の記述との比較を行う。具体的な課題（RQ）は以下の通りである。

- RQ1 「いっぱい」を軸にした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入を考えた際に、候補として挙がるのはどのような文型か、コーパスデータを用いて明らかにする。
- RQ2 候補として挙げた文型について、前方に共起する名詞の特徴は何か、「〈対象〉か〈空間〉か」、「評価性」の2つの観点から名詞の特徴を明らかにする。
- RQ3 候補として挙げた文型について、後方に共起する表現にはどのような特徴があるのか、文における出現位置の観点から明らかにする。

以下、3節において、「だらけ／まみれ／ずくめ」を導入する際に軸となりうる「いっぱい」の文型を定める。次に、4節と5節では、3節で定めた「いっぱい」の文型における、前方に共起する名詞の特徴を分析し、「だらけ／まみれ／ずくめ」との比較を行う。6節から8節では、同じく3節で定めた「いっぱい」の文型について、後方に共起する表現の特徴を分析し、「だらけ／まみれ／ずくめ」と比較する。その後、9節で「いっぱい」を軸とした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入可能性について検討する。最終10節では、まとめと今後の課題を述べる。

3. 「だらけ／まみれ／ずくめ」の軸となりうる「いっぱい」の文型

本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス、データバージョン 2021.03』（以下、BCCWJと呼ぶ）をコーパス検索アプリケーションの「中納言、バージョン 2.7.2」を用いて検索した。

BCCWJにおいて、キーの条件を「指定しない」、後方共起条件として「キーから1語」、語彙素を「一杯」に設定（検索に当たり、「いっぱい」は語彙素において漢語「一杯」で登録されている）し、検索対象はコアデータと非コアデータ共に選んで検索を行った。その結果、10607件のデータを収集した。

次の表4は「いっぱい」の前接語の上位20位（全体カバー率74%）を示している。

表4 「いっぱい」に前接する語 (TOP20)

順位	前接語	用例数	割合
1	が	2126	20.0%
2	精	1005	9.5%
3	で	948	8.9%
4	を	636	6.0%
5	「、」	429	4.0%
6	は	366	3.5%
7	も	339	3.2%
8	に	295	2.8%
9	お腹	239	2.3%
10	力	237	2.2%
11	元気	187	1.8%
12	だ	180	1.7%
13	目	173	1.6%
14	「 」	129	1.2%
15	月	113	1.1%
16	手	95	0.9%
17	一杯	94	0.9%
18	もう	91	0.9%
19	腹	90	0.8%
20	胸	74	0.7%

(出所) BCCWJ のデータより筆者作成。

表4が示すように、「いっぱい」の前接語の上位20位には、「が」「で」「を」のような助詞と「精」「お腹」「力」などのような名詞が多く観察された。さらに、全ての前接語を品詞の観点から見ると、助詞は4828例(45.5%)^(注4)確認され、全体の半数近くを占めていることが分かる。また、残りの4割近く(4237例, 39.9%)は名詞が前接しており、その上位の10語である「精(9.5%) / お腹(2.3%) / 力(2.2%) / 元気(1.8%) / 目(1.6%) / 月(1.1%) / 手(0.9%) / 腹(0.8%) / 胸(0.7%) / 口(0.6%)」が21.5%を占めている。

ここで、太田(2017, p.79)においては、「だらけ/まみれ/ずくめ」は「いずれも基本的に名詞に接続」することを踏まえ、3つの表現に前接する名詞の特徴を考察している。しかしながら、「名詞+いっぱい」の上位10位に来ている「精一杯」「お腹いっぱい」「力いっぱい」のような例は複合化したものであり、「名詞+だらけ/まみれ/ずくめ」とは用法が異なっている。そのため、本稿では、これらの複合化した表現が多く含まれている「名詞+いっぱい」のパターンを分析から外した^(注5)。なお、このような複合化した表現は「名詞+いっぱい」の上位10位に来ているものだけで53.4%を占めていたことを報告しておく。

次の表5は「いっぱい」に前接する助詞の上位10位を示したものである。

表5 「いっぱい」に前接する助詞 (TOP10)

順位	助詞	用例数	割合
1	が	2121	43.9%
2	で	941	19.5%
3	を	636	13.2%
4	は	366	7.6%
5	も	339	7.0%
6	に	295	6.1%
7	の	61	1.3%
8	と	37	0.8%
9	から	27	0.6%
10	へ	3	0.1%

(出所) BCCWJのデータより筆者作成。

表5が示しているように、「いっぱい」に前接する助詞において、「が」「で」「を」が上位3語であり、これらの用例数を合算すると3698例にのぼり、前接する助詞の中の76.6%を占めている。また、冒頭で述べた学習者の産出例の(1)～(3)においては、「だらけ／まみれ／ずくめ」は同じく「が／でいっぱい」に置き換えられることから、3形式が「が／でいっぱい」との関連性が強く見られることが窺える。

なお、「をいっぱい」に関しては、「こんなに泥だらけにして(=こんなに泥をいっぱいにつけて)！」のように、「だらけ／まみれ／ずくめ」と置き換えが可能な場合があるが、次の(9)(10)などのように「だらけ／まみれ／ずくめ」に言い換えられない例も多数確認された。そのため、「をいっぱい」に関しては別稿へ譲ることとする。

(9) 燃えていない家のハンドガメから、重箱に水をいっぱい入れて持っていく。

(『日本の原爆記録』LBf3_00088)

(10) ブロックの間をいっぱいに開けると、バッフル効果は少なく、低域の量感は減る。

(『オーディオ装置120%活用法』LBc5_00019)

したがって、本稿では「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」の前方に共起する表現を比較するため、これ以降では「がいっぱい」と「でいっぱい」に前接する名詞の特徴を見ることにする。

4. 「がいっぱい」の分析

この節では「がいっぱい」に前接する名詞の特徴に関して分析を行う。

ここで、比較対象として、表6に太田(2017)の結果を引用し、「だらけ／まみれ／ずくめ」に前接する語の特徴を指摘しておく。

表6 「だらけ(だ) / まみれ(だ) / ずくめ(だ)」の比較1

	だらけ(だ)	まみれ(だ)	ずくめ(だ)
出現数	全 1916 例	全 504 例	全 175 例
前接語 (上位 8 種)	傷 (127) 血 (125) 泥 (104) しわ (97) こと (88) ほこり (50) 穴 (48) 岩 (37)	血 (175) 泥 (65) 汗 (53) ほこり (35) 油 (16) 土 (11) 砂 (11) 借金 (10)	黒 (70) こと (43) 異例 (8) 働き (5) 規則 (4) 白 / 記録 (各 3) 初めて / 灰色 / 規律 (各 2)
生産性指数	13.2	3.6	3.3

(出所) 太田 (2017, p.78) 表6を引用。

表6に示されている「だらけ/まみれ/ずくめ」に前接する名詞を本稿における〈空間〉か〈対象〉かという定義(4)と(5)に照らすと、「だらけ/まみれ/ずくめ」に前接する語は全て〈対象〉を表している。これは以下の事実から確認できる。

具体的には、太田(2017, p.78)では「だらけ/まみれ/ずくめ」の典型的な用例として以下の3つを挙げている。

- (11) 息子が泣きながら全身傷だらけで帰ってきた。
- (12) 部屋には血まみれのナイフが落ちていた。
- (13) ドアを開けると、黒ずくめの恰好をした男が立っていた。

(太田 2017, p.78)

上記の用例において、「傷/血/黒」はそれぞれ、「全身/ナイフ/恰好」を〈空間〉とした〈対象〉を表している。この事実¹に次の例を加えて考えてみる。

- (14) 傷に薬が染みる。(空間)
- (15) 傷が痛む。(対象)
- (16) 血(だまり)にナイフが落ちる。(空間)
- (17) 血が薬品と混じる。(対象)
- (18) 黒(色)に青を入れる。(空間)
- (19) 黒(色)が覆う。(対象)

上記の例から分かることは「傷/血/黒」は文によって〈空間〉としても〈対象〉としても機能するという事実である。にもかかわらず、(11)～(13)においては、「傷/血/黒」は〈対象〉を表す語として機能している。このことは「だらけ/まみれ/ずくめ」が前方に共起する語を〈対象〉を表す語として機能させるということである。この事実を以下のようにまとめておく。

- (20) 〈対象〉 {だらけ/まみれ/ずくめ} (〈対象〉が満ちている)

また、「評価性」の観点から見ると、太田(2017)が指摘する通り、傾向としては「だらけ/まみれ」はマイナスイメージ、そして「ずくめ」は中立的イメージを持つ語が多く出現している。以下、この事実を比較対象として議論を進める。

4.1 「がいっぱい」の用法

「がいっぱい」の前接する語を品詞別にみると、名詞は2121例中97.8%（延べ語数は2074例、異なり語数は794例）確認された。次の表7は、共起する上位15種の名詞を示したものである。

表7 「がいっぱい」に前接する名詞

前接語 (TOP15)	出現 頻度	割合	空間と対象 (空間/対象/両方可能)	評価性 (プラス/マイナス/中立的)
頭	114	5.5%	空間	中立的
こと	108	5.2%	対象	中立的
胸	92	4.4%	空間	中立的
人	79	3.8%	対象	中立的
物	74	3.6%	対象	中立的
お腹	69	3.3%	空間	中立的
花	29	1.4%	対象	中立的
達	28	1.4%	対象	中立的
の	26	1.3%	対象	中立的
危険	19	0.9%	対象	マイナス
ところ	16	0.8%	両方可能	中立的
写真	15	0.7%	対象	中立的
不安	15	0.7%	対象	マイナス
思い出	14	0.7%	対象	中立的
さん	13	0.6%	対象	中立的

(出所) BCCWJのデータより筆者作成。

表7から分かるように、「がいっぱい」に前接する名詞には「頭/胸/お腹」のような典型的には〈空間〉を表す表現もあれば、「こと/人/物/花/達/危険/写真/不安/思い出」のような、典型的には〈対象〉を表す表現も確認される。また、「ところ」のように、〈空間〉と〈対象〉の両方として捉えられる表現も観察される。以下具体例を挙げる。

- (21) そしてさっきの所へ帰って、袋が一杯になるまで掘り続ける、という次第である。(空間)
 (『滅びゆくことばを追って』LBm3_00088)
- (22) 鬱病でもあるということですが、衝動的な自殺など危険な要素がいっぱいです。(対象)
 (Yahoo! 知恵袋 OC09_01582)

以上の結果を踏まえると、以下に示すように、「がいっぱい」には、2つの用法があることが分かる。

- (23) おなかがいっぱい：〈空間〉がいっぱい (空間が (何かで) 満たされている)
 (24) 思い出がいっぱい：〈対象〉がいっぱい (対象が満ちている)

なお、この用法基準を「だらけ/まみれ/ずくめ」に適応すると、「だらけ/まみれ/ずくめ」は(24)の用法を主としていることになる。それでは、「がいっぱい」の用法においては、(23)の用法と(24)の用法のどちらが量的に多いのであろうか、次の表8は、「がいっぱい」に前接する名詞の全794語を観察した結果である^(注6)。

表8 「がいっぱい」に前接する語の特徴1（空間と対象）

前接語	空間	対象	両方可能	合計
名詞数（異なり語数）	57	724	13	794
割合	7.2%	91.2%	1.6%	100%

（出所） BCCWJ のデータより筆者作成。

表8が示しているように「予約／レシピ／要素／情報／イベント／話／思い／言葉」のような〈対象〉を表す表現は724語（91.2%）観察され、全体の9割を占めていることが分かる。つまり、「がいっぱい」の用法としては、「だらけ／まみれ／ずくめ」と同様、〈対象〉を表す名詞が前接する用法が多数を占めると言え、「だらけ／まみれ／ずくめ」との用法間の類似性を見出すことができる。

とは言え、「容量／手／袋／ごみ箱／鼻／テーブル／ファイル」などのような〈空間〉を表す表現が57語（7.2%）観察された。また、僅かながら、「ところ／口／袋／家／部屋／心／タンク／箱」など、〈空間〉と〈対象〉の両方として捉えられる語も13語観察された。その実例としては、以下のような例である。

(25) 大きな大きな飴で、子どもだったら口がいっぱいになっちゃうような飴を売っていたのがげんこつ飴屋さん。（空間）
（『江戸売り声百景』LBr7_00023）

(26) 乗換えとかあるのでしょうか... 東京駅は出入り口がいっぱいあるのですよね？（対象）
（Yahoo! 知恵袋 OC13_00796）

4.2 「がいっぱい」に前接する語の評価性

この節では、分析対象を(24)のような「〈対象〉がいっぱい」用法に絞り、前接する名詞の「評価性」について分析する。次の表9は「〈対象〉がいっぱい」に前接する名詞の「評価性」を示したものである。

表9 「がいっぱい」に前接する語の特徴2（評価性）

前接語	マイナス	プラス	中立的	合計
名詞数（異なり語数）	16	17	691	724
割合	2.2%	2.4%	95.4%	100%

（出所） BCCWJ のデータより筆者作成。

表9が示しているように、マイナス評価を表す表現はあったものの、16語（2.2%）しか見られなかった。残りの708語（97.8%）は非マイナス的表現であり、その内、中立的な表現は691語（95.4%）を占めていた。

プラス評価に伴って使われている表現としては、「魅力／楽しみ／笑顔／笑い声／愛情／期待／憧れ／情熱／幸福／幸せ／幸／希望」などが観察された。それに対して、マイナス評価を表現する語としては「危険／不安／問題／詐欺／悲しみ／心配／腐敗／憎しみ／悪口／噂／不満／アンチ」などが観察された。

一方、「こと／もの／ところ／気持ち」のような語のレベルから判断できないものは、本稿では「中立的」と定めた。その理由は連体修飾節の内容によってその評価性が分かれるからである。

たとえば、表7における前接語2位の「こと」であるが、108例のうち、24例は「楽しいこと／いいこと／素敵なこと／面白いこと／都合のいいこと／懐かしいこと／うれしいこと」のようなプ

ラス評価として使われている。また、マイナス評価の表現も「考えにくいこと／恥ずかしいこと／やましいこと／大変なこと／慣れないこと／怖いこと／心細いこと／困ったこと／苦しいこと／つまらないこと／難しいこと」など、27例見られた。具体的な用例としては次のようなものである。

(27) 私はいちばん若いからというので、遠い熊本国税局へ赴任を命じられたのですが、県民の気性はいいし、いい思い出がいっぱいあります。(プラス)

(『大蔵省主税局』LBb3_00042 20430)

(28) 誕生日というとなんか寂しい思い出がいっぱいあったけれど、実は今年、生まれて初めて誕生パーティーをやったんですよ。(マイナス)

(『十歳のころ』LBq2_00080)

また、残りの57例は「知らないこと／やりたいこと／やり残したこと／言いたいこと／伝えたいこと／書くこと／話すこと／考慮しなければいけないこと」などのように、評価性からみれば中立的な表現として捉えられるものであった。太田(2017, p.79-81)では、「こと+だらけ」はほぼマイナス評価を表し、「こと+ずくめ」は基本的にプラス評価を表すと指摘されている。この記述を踏まえると「こと+がいっぱい」の振舞いは評価性という点において、プラス・マイナス・中立的のいずれの表現も取りうることから、「こと+だらけ」と「こと+ずくめ」と比べて、「評価性」という点においてその適応範囲が広いことが窺える。

その他、「思い出」の前接語にも「いい／楽しい／寂しい／色んな／たくさん／十七年間の」などが、「こころ」についても「センチメンタルな情緒に富んだ／驚きと恥ずかしさ／怒りや不平不満／好奇心」など、プラス・マイナス・中立的な表現のいずれとも共起する場合が見られた。

4.3 ここまでのまとめ

以上、コーパスから得られたデータを用いて、「がいっぱい」について分析を行った。「がいっぱい」に関しては、(23)と(24)に示したように2つの用法を持つものの、量的には「〈対象〉がいっぱい」の用法が多いことが分かった。この点は前接する名詞が〈対象〉を表す「だらけ／まみれ／ずくめ」との類似点であると言える。また、「評価性」に関しては、「だらけ／まみれ／ずくめ」とは異なり、マイナス評価だけでなく非マイナス評価を表す語とも共起可能である点で「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも汎用性の高い表現であると言える。

5. 「でいっぱい」の分析

この節では「でいっぱい」に前接する名詞の特徴に関して分析を行う。

5.1 「でいっぱい」の用法

次の表10は、「でいっぱい」の前接語上位15語を示したものである。

表 10 「でいっぱい」に前接する名詞

前接語 (TOP15)	出現 頻度	割合	空間と対象 (空間／対象／両方可能)	評価性 (プラス／マイナス／中立的)
気持ち	137	15.4%	対象	中立的
こと	44	4.9%	対象	中立的
感	38	4.3%	対象	中立的
さ	38	4.3%	対象	中立的
思い	28	3.1%	対象	中立的
人	28	3.1%	対象	中立的
達	21	2.4%	対象	中立的
予約	16	1.8%	対象	中立的
客	13	1.5%	対象	中立的
念	8	0.9%	対象	中立的
心	8	0.9%	対象	中立的
匂い	8	0.9%	対象	中立的
さん	8	0.9%	対象	中立的
感謝	7	0.8%	対象	プラス
喜び	7	0.8%	対象	プラス

(出所) BCCWJ のデータより筆者作成。

表 10 が示しているように「でいっぱい」の前接語上位 15 種は全て〈対象〉を表す表現であった。さらに、次の表 11 は「でいっぱい」に前接する名詞の 347 語を調査した結果である。

表 11 「でいっぱい」に前接する語の特徴 1 (空間と対象)

前接語	対象	空間	両方可能	合計
名詞数 (異なり語数)	347	0	0	347
割合	100%	0%	0%	100%

(出所) BCCWJ のデータより筆者作成。

表 11 に示しているように、「でいっぱい」に前接する名詞の 347 語は全て〈対象〉を表す語であった。つまり、「でいっぱい」の用法は、「がいっぱい」とは異なり、以下の用法のみということになる。

(29) 感謝でいっぱい：〈対象〉でいっぱい (対象で満ちている)

ここで、「心／車／箱／花瓶／船／舟／空瓶／牛車／水田／木箱／紙袋／宇宙／カゴ」のような名詞は〈空間〉を表す余地があるように思われるかもしれない。しかし、次の用例が示すように「でいっぱい」に前接すると、〈対象〉を表す名詞として使用されることになる。

(30) 今また十分な供え物をいただきました。ご恩は忘れません。喜びのこころでいっぱいです。
(対象) (『新編日本古典文学全集』LBj9_00029)

(31) 僕は、通りすぎて行くこれらの顔、宇宙でいっぱいになったこれらの箱を、大そう愛した
ものだった。(対象) (『ポトマック』LBo9_00020)

このように、用法の観点から見ると、「でいっぱい」の用法は、「だらけ／まみれ／ずくめ」の用法と一致していることが分かる。

5.2 「でいっぱい」に前接する語の評価性

次に、「でいっぱい」に前接する語の「評価性」について考察を行う。次の表12は「でいっぱい」に前接する全名詞の「評価性」の割合を示したものである。

表12 「でいっぱい」に前接する語の特徴2（評価性）

前接語	マイナス	プラス	中立的	合計
名詞数（異なり語数）	22	14	311	347
割合	6.4%	4.0%	89.6%	100%

（出所） BCCWJのデータより筆者作成。

表12から分かるように、「でいっぱい」の前接語にはマイナス評価を表す語が22語（6.4%）見られ、残りの325語（93.6%）は非マイナス評価を表す語であった。また、非マイナス評価を表す語の中で、中立的な表現が311語（89.6%）確認され、全体の347語のうち9割近くを占めていた。

具体的な内訳としては、プラス評価を表す表現としては「感激／感謝／楽しみ／希望／期待／愛情／快楽／安堵」のようなものが見られた。その一方で、マイナス評価を表す表現としては、「悲しみ／憎しみ／恐怖／怒り／緊張／絶望／憎しみ／恐れ／心配／不安」などが観察された。なお、これらのほか残りはすべて「気持ち／こと／思い／人／達／予約／客／念／匂い／さん」のような中立的表現であった。

しかし、上記のような例は「でいっぱい」においては少数であり、基本的に中立的表現と相性がよく、話し手のプラス・マイナス評価を表す語とも生起できる表現であると言える。

5.3 ここまでのまとめ

以上、コーパスから得られたデータを用いて、「でいっぱい」について分析を行った。「でいっぱい」に関しては、(29)に示したように一つしか用法を持たず、前接する名詞が〈対象〉を表す「だらけ／まみれ／ずくめ」の用法と一致している。また、「評価性」に関しては、「だらけ／まみれ／ずくめ」とは異なり、マイナス評価だけでなく非マイナス評価を表す語とも共起可能である点で「がいっぱい」と同様、「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも汎用性の高い表現であると言える。

6. 「が／でいっぱい」の後方に共起する表現の傾向

前節までは、「いっぱい」の前方に共起する語の観点から分析を行った。その結果、「だらけ／まみれ／ずくめ」に関連するのは「が／でいっぱい」であることを確認した。

本節では、「が／でいっぱい」に分析の対象を絞った上で、それらに後接する表現に注目して、その特徴を分析する。

「が／でいっぱい」の後方に共起する語の特徴を見るために以下の条件で検索を行った。具体的には、キーの条件を「指定しない」、前方共起条件として「キーから1語」、語彙素が「一杯」、及び、「キーから2語」、「品詞」を「大分類」の「助詞」と語彙素が「が／で」と設定し、検索対象をコアデータと非コアデータの両方に設定して検索を行った。

検索の結果、「がいっぱい～」は2082、「でいっぱい～」は982の用例が検出された。次の表13は「が／でいっぱい」に後接する語の上位20位を示している。

表 13 「が/でいっぱい」に後接する語 (TOP20)

順位	がいっぱい			でいっぱい		
	後接語	用例数	割合	後接語	用例数	割合
1	に	290	13.9%	に	255	26.0%
2	ある	169	8.1%	です	125	12.7%
3	「。」	144	6.9%	だっ	106	10.8%
4	で	129	6.2%	でし	63	6.4%
5	です	95	4.6%	だ	62	6.3%
6	の	91	4.4%	の	56	5.7%
7	いる	79	3.8%	な	36	3.7%
8	「！」	79	3.8%	で	36	3.7%
9	あり	69	3.3%	「。」	36	3.7%
10	あっ	65	3.1%	「、」	18	1.8%
11	だ	58	2.8%	である	16	1.6%
12	い	55	2.6%	であっ	11	1.1%
13	出	54	2.6%	いっぱい	11	1.1%
14	だっ	51	2.4%	やり	10	1.0%
15	入っ	46	2.2%	飲ん	7	0.7%
16	詰まっ	34	1.6%	やる	7	0.7%
17	な	30	1.4%	「！」	7	0.7%
18	「」	27	1.3%	やっ	6	0.6%
19	でし	24	1.2%	と	6	0.6%
20	つまっ	22	1.1%	やろう	5	0.5%

(出所) BCCWJ のデータより筆者作成。

表 13 から分かるように、まず、「がいっぱい」の後接語の上位 20 語 (カバー率 77.4%) を見ると、格助詞については、「～に」が 290 例 (13.9%) と最も多い。それに続いて「～で」が 129 例 (6.2%)、「～の N」が 91 例 (4.4%) とそれぞれ 4 位と 6 位に位置している。残りは「ある／いる／出る／入る／詰まる」のような動詞の用法 (28.5%) 及び「です／だ」(12.4%) などと「。／！／」(12%) のように「いっぱい」が文の述部として機能している場合であることが分かる。

次に、「でいっぱい」の後方共起 (982 例) の上位 20 語 (カバー率 89.5%) を観察すると、「がいっぱい」と同じく、格助詞「～に」が 255 例 (26.0%) と最も多い。また「～の N」は 56 例 (5.7%)、「～で」は 36 例 (3.7%) と、それぞれ 5 位と 8 位にきている。残りに多く見られるのは「です／だ／である」(42.6%) のような「いっぱい」が文の述部として機能している場合である。

ここで、次の表 14 は太田 (2017) における「だらけ／まみれ／ずくめ」及び本稿で考察する「が/でいっぱい」の後接形態の特徴についてまとめたものである。

表14 「が／でいっぱい」と「だらけ」「まみれ」「ずくめ」の後接する形態の比較

	がいっぱい (2082)	でいっぱい (982)	だらけ (1916)	まみれ (504)	ずくめ (175)
後接 の 形 態	～に (290/13.9%)	～に (255/26.0%)	～のN (720/37.6%)	～のN (215/42.7%)	～のN (83/47.4%)
	～で (129/6.2%)	～のN (56/5.7%)	～に (334/17.4%)	～に (163/32.3%)	～で (23/13.1%)
	～のN (91/4.4%)	～で (36/3.7%)	～で (229/12.0%)	～で (53/10.5%)	～だ (11/6.3%)

(出所) BCCWJ 及び太田 (2017) のデータより筆者作成。

表14 が示しているように、「だらけ／まみれ／ずくめ」はいずれも「～のN」、すなわち、名詞を修飾する連体修飾用法が一番多く見られる。それに加えて、「だらけ／まみれ」に関しては「が／でいっぱい」において顕著であった「～に」が続く。

したがって、以下では、「が／でいっぱい」の後接形態に関して、「だらけ／まみれ／ずくめ」と共通する、「～に」と「～のN」の事例を分析しながら、「が／でいっぱい」に後接する語の特徴を分析することにする。

7. 「が／でいっぱい」の分析

この節では「が／でいっぱい」に後接する表現に関して分析を行う。

まず、「がいっぱいに」の事例は290例が確認された。その中で特徴的な点を挙げると、「なる(がいっぱいになる)」が245例確認され、全体の84%を占めていることが分かる。以下はその実例である。

(32) 腹がいっぱいになると、必ずといってよいほど、水場の近くで休息する。

(『トラ』Lba4_00017 7070)

また、残りの44例については、「広がる／詰める／詰まる／流れ込む／広げる／満たす／飾る／張る／開く」のような動詞が後接しており、空間のイメージが喚起される動詞と相性がよいことが考えられる。以下は、その実例である。

(33) 夜には満天の星空がいっぱいに広がる。

(『北東北』Lbt2_00062)

(34) まず、スケジュール表で朝から晩まで予定が一杯に詰まっている日を見つけ出す。

(『続「超」整理法・時間編』OB4X_00274)

次に、「でいっぱい」の事例は255例が確認された。特徴的な点としては、「でいっぱい」においても「がいっぱいに」と同様、「なる(でいっぱいになる)」が208例確認された。それに加えて、「する(でいっぱいにする)」も34例が観察され、両者を合わせると全体の94.9%を占めている。以下はその実例である。

(35) すぐに木島さんの小さなちゃぶ台は、おかずでいっぱいになった。

(『美乃里の夏』LBs9_00098)

- (36) その一途さを爽やかに発揮すればするほど、この少女の哀れさは観客の心を同情でいっぱいにするでしょう。
(『歌舞伎通』LBc7_00005 34020)

つまり、ここまでの事実をまとめると「が／でいっぱいに」においては、「なる」という動詞が後接する場合が圧倒的に多いということである。

この事実について、太田(2017)では、「だらけに～」と「まみれに～」においても、「～になる」と「～にする」を合わせると、それぞれ94.0%と95.1%を占めていることが報告されている。つまり、後接する表現形態については、「が／でいっぱいに」と「だらけ／まみれ／ずくめ」とは「～になる」という表現が後接する点において共通していることが分かる。また、特に「でいっぱい」に関しては、「する」が後接する点においても、「だらけ／まみれ／ずくめ」と一致する点が多いことが分かる。

以上、「が／でいっぱいに」の後方に共起する表現について分析を行った。

8. 「が／でいっぱいの」の分析

次に「が／でいっぱいの」に後接する表現に関して分析を行う。

調査の結果、「がいっぱいの」の事例は91例、「でいっぱいの」の事例は62例が観察された。そのうち、「僕が一杯のジョッキをあける」「せつない気持ちで胸がいっぱいの夜」「腹がいっぱいのとき」「心の中で不安がいっぱいの証拠」「なにかで頭がいっぱいのような」といったような、本稿の分析対象と用法が異なっているもの、及び「外の関係」として見ないと〈空間〉と〈対象〉の対応関係が分からないものを除外した結果、「がいっぱいの」は60例(異なり語数57語)、「でいっぱいの」は48例(異なり語数48語)となった。

これ以降では、格助詞「の」には名詞が後接することを鑑み、「が／でいっぱいの」が修飾する名詞を「いっぱい」の前方に共起する名詞の特徴を分析する際に使用した「〈空間〉と〈対象〉」と「評価性」の観点から考察を行う。

まず、「がいっぱいの」に後接する57語を考察した。結果を表15にまとめる。

表15 「がいっぱいの」に後接する名詞(57語)

黒い雲(1, 対象, 中立的), サイト(4, 空間), 建物/山腹/めんつゆ/海域/場所/田園風景/この絵/絵/おやつ/スパイス/遊び/粗悪品/コース/神社境内/宇宙/机/黒胡麻/危険海域/校庭/サーバー/道/人/この時期/おはなし会/サークル/写真/交流の場/水晶/神戸の街/1年/公園/眺め/イベント/強化試合/新生活/文章/庭/大広間/鴨川/海/ロビー/バザー/山村体験/環境/夏の午後/ライブ/がんばり/ケララカレー/お正月/チーム/みそ汁/プラン/お宅/機体/ルイン(各1, 空間)

(出所) BCCWJのデータより筆者作成。

表15が示しているように、「がいっぱいの」に後接する名詞は基本的に〈空間〉を表す名詞であるものの、〈対象〉を表す名詞も見られる。具体的な内訳としては、「がいっぱいの」が修飾する57語を文脈から観察すると、56語が「サイト/山腹/スパイス/校庭/海域/公園」など、〈空間〉を表す名詞であった。また、僅かであるが、「黒い雲」のような〈対象〉を表す名詞も1語見られた。それに加えて、その1語の評価性は中立的であると判断できる。次は、その実例である。

- (37) 生きている化石といわれるカブトガニの情報が**いっぱい**のサイト。(空間)
(『理科であそぼう』LBq3_00123)
- (38) 遊び心が**いっぱい**のおやつを友だちと食べるときは、材料や作り方の話題で盛り上がり、楽しさも倍増します。(空間)
(『平野レミのおやつ時間』LBm5_00003)
- (39) ところが、そのときはもう、そらが**いっぱい**の黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、蟬があがあ鳴いてるて、そこらは何とも云はれない、恐ろしい景色にかはってるた。(対象/中立的)
(『宮沢賢治全集』Lba9_00084)

この点については「が**いっぱい**」が(23)と(24)に示した2つの用法を有することに起因するものと考えられる。具体的には、「NP1が**いっぱい**のNP2」においては、NP1が〈対象〉を表す場合にはNP2が〈空間〉を、NP1が〈空間〉を表す場合にはNP2が〈対象〉を表すことになる。そして、傾向として「が**いっぱい**」においては、ガ格名詞(NP1)が〈対象〉を表す用法が多数を占めていた。そのため、結果として「が**いっぱい**の」のノ格名詞(NP2)は〈空間〉を表す名詞が多く出現したのであろうと推察される。

次に、「で**いっぱい**の」が修飾する48語を考察する。以下の表16は、その結果を示している。

表16 「で**いっぱい**の」に後接する名詞(48語)

顔/地下鉄/平野/バス/鞆/フロア/都市/部屋/お前の心/馬小屋/しろもの/折りパイ生地/新聞紙/社会環境/あまの川のまん中/車内/小道/若者/フェニキア/石/食卓/気持ち/子宮/旅行初心者/かご/パールジュマンセンターショッピングモール/焼酎/清水寺/イタリアン・ポテリー・アウトレット/空/ブロック/画廊/目/電算室/庶民/川/待受画像サイト/キオ/居間/彼/学生たち/砂漠/雑木林/カタログ/春の中/店/金魚鉢/家(各1, 空間)
--

(出所) BCCWJのデータより筆者作成。

表16に示しているように、「で**いっぱい**の」に後接する48語を文脈から観察すると、基本的に「顔/地下鉄/平野/バス/フロア/都市/部屋」のような〈空間〉を表す表現になっていることが分かる。

- (40) 鳥で**いっぱい**の空に思いを馳せている人間のふきだしのようでもある。(空間)
(『パロマー』PB19_00033)
- (41) 笑顔が、茶好きのひとのみならず、好奇心で**いっぱい**の京都の庶民を引きつけた。(空間)
(『江戸生きかたの達人たち』PB22_00019)

この結果は考えてみれば当然である。なぜならば、「で**いっぱい**」の用法は「対象で**いっぱい**」の用法の一つしかなかった。そのため、「NP1で**いっぱい**のNP2」という場合において、NP1が〈対象〉を表すのであれば、NP2は必然的に〈空間〉を表すことになるのである。

上記の事実に対して、太田(2017, p.83)では「だらけ/まみれ/ずくめ+のN」構文における名詞として、「だらけ」の場合は、「顔(47例)/手(20例)/頭(7例)」など目のつきやすい体の部分が高位に見られること、「まみれ」の場合は、「顔(7例)/手(7例)/指(6例)/体(3例)」などの体の部分または全体が見られること、そして、「ずくめ」に関しては、「男(6例)」を筆頭に「服(3例)/衣装/衣服/恰好(各2例)/スーツ(1例)」と着ているものと共起しやす

いことを指摘している。

さて、上記に挙げた名詞を本稿における〈対象〉か〈空間〉かという定義に照らせば、これらはすべて〈空間〉を表していることになる。この結果についても考えてみれば当然であり、4節で述べたように「だらけ／まみれ／ずくめ」の前方に共起する語はいずれも〈対象〉を表す語であった。ということは、「NP1 {だらけの／まみれの／ずくめの} NP2」という表現においては、NP1が〈対象〉を表す名詞であれば、必然的にNP2は〈空間〉を表す名詞であると言える。つまり、「NP1でいっぱいのNP2」と同じ現象が起きていると考えられるのである。

以上、「が／でいっぱいの」の後方に共起する表現について分析を行った。

9. 考察

ここまで、「いっぱい」という形式を軸として「だらけ／まみれ／ずくめ」を導入することは可能かという観点から、「いっぱい」における用法、及び「いっぱい」と共起する名詞の特徴に関して分析を行ってきた。「いっぱい」についてここまでで分かってきたことを以下にまとめる。

- ① 「いっぱい」は「だらけ／まみれ／ずくめ」に比べて、「がいっぱい」「でいっぱい」「をいっぱい」のような格助詞を伴う形で多様なバリエーションを持つ（3節）。その中で、「だらけ／まみれ／ずくめ」との用法的類似性を有するのは「がいっぱい」と「でいっぱい」である（4節・5節）。
- ② 「がいっぱい」には、ガ格に〈対象〉を表す名詞が来る場合と、ガ格に〈空間〉を表す名詞が来る場合の2つの用法がある（5節）。また、「がいっぱい」の後方に共起する表現の特徴としては、「がいっぱいに」の場合には、動詞「なる」が後続するケースが多く（7節）、「がいっぱいの」に関しては、「がいっぱいの」2つの用法に連動して「〈対象〉がいっぱいの〈空間〉」となる場合と「〈空間〉がいっぱいの〈対象〉」となる場合がある（8節）。
- ③ 「でいっぱい」は、「がいっぱい」とは異なり、デ格に〈対象〉を表す名詞が来る場合の用法しか持たない（6節）。また、「でいっぱい」の後方に共起する表現の特徴としては、「でいっぱいに」の場合には、動詞「なる」と「する」が後続するケースが多く（7節）、「でいっぱいの」に関しては「対象でいっぱいの空間」というパターンを形成する（8節）。
- ④ 「いっぱい」の「評価性」に関しては、プラス・マイナス・中立的の表現のいずれとも共起可能であり、偏りが見られるわけではない。

また、上記の結果を太田（2017）における「だらけ／まみれ／ずくめ」の記述と照合させると以下のことが言える。

- ⑤ 「いっぱい」と「だらけ／まみれ／ずくめ」との関係性について、「だらけ／まみれ／ずくめ」とは「いっぱい」の有する多様な文型のうちの一部と重なり、それは「〈対象〉がいっぱい」の場合と「〈対象〉でいっぱい」の場合である。
- ⑥ 「〈対象〉がいっぱい」と「〈対象〉でいっぱい」の後方に共起する表現に関しては、「～になる」や「～のN」という表現が後続しやすい点で「だらけ／まみれ／ずくめ」と共通する。
- ⑦ 「評価性」に関しては、「だらけ／まみれ」が主としてマイナス評価、「ずくめ」は中立的評価を表す場合に偏るのに対して、「がいっぱい」と「でいっぱい」に関してはプラス・マイナス・中立的のいずれの評価を表す名詞とも共起可能な点で汎用性が高い。

なお、⑤に関しては補足がある。「がいっぱい」は確かに「〈対象〉がいっぱい」という用法を有する点で「だらけ／まみれ／ずくめ」と共通する用法を持つ。しかし、「がいっぱい」はもう一つ「〈空間〉がいっぱい」の用法を有する点で、「だらけ／まみれ／ずくめ」よりも用法が多い。そういう点においては、「だらけ／まみれ／ずくめ」とは完全に一致しているわけではない。

それに対して、「でいっぱい」に関しては「〈対象〉でいっぱい」という用法のみを有する点において「だらけ／まみれ／ずくめ」と用法の範囲も一致している。そのため、厳密には「だらけ／まみれ／ずくめ」の軸として導入する文型としてふさわしいのは「でいっぱい」であると言える。

また、「評価性」に関しては、「だらけ／まみれ」が基本的にマイナス評価、「ずくめ」は中立的評価に偏るのに対して、「がいっぱい」と「でいっぱい」は、マイナス評価に偏るわけではない。その点においては、「NPだらけ／まみれ／ずくめ」は「NPが／でいっぱい」で言い換えることが可能であるが、その逆は必ずしもそうではないという関係になっていることが分かる。

以上を踏まえると、「いっぱい」という形式について、「がいっぱい」と「でいっぱい」という文型を軸として、「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入に繋げていける可能性は示されたと言える。

10. まとめと今後の課題

本稿では、「いっぱい」を軸にした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入可能性を探るために、コーパスデータを基に、「いっぱい」の運用実態を分析し、「だらけ／まみれ／ずくめ」の運用実態との比較を行った。その結果次のことが明らかになった。

RQ1 「いっぱい」を軸にした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入を考えた際に、候補として挙がるのはどのような文型か、コーパスデータを用いて明らかにする。

- (42) 運用実態を鑑みると「だらけ／まみれ／ずくめ」の軸となりうる「いっぱい」の文型には「がいっぱい」と「でいっぱい」の2つが存在する。その中でもそれぞれの有する用法を考慮した場合には「でいっぱい」がふさわしい。

RQ2 候補として挙げた文型について、前方に共起する名詞の特徴は何か、「〈対象〉か〈空間〉か」、「評価性」の2つの観点から名詞の特徴を明らかにする。

- (43) 「がいっぱい」にはガ格に〈対象〉を表す名詞が来る場合と〈空間〉を表す名詞が来る場合の2つの用法があるのに対して、「でいっぱい」はデ格に〈対象〉を表す名詞が来る場合の用法しか持たない。

- (44) 「〈対象〉がいっぱい」と「〈対象〉でいっぱい」に関して、〈対象〉を表す名詞は、プラス・マイナス・中立的評価のいずれも表しうる。

RQ3 候補として挙げた文型について、後方に共起する表現にはどのような特徴があるのか、文における出現位置の観点から明らかにする。

- (45) 「がいっぱい」「でいっぱい」ともに、「が／でいっぱいになる」のように動詞述語文の項として出現している場合や、「が／でいっぱいのN」のようにノ格を伴って連体修飾構造を成す場合が多く見られる。

さて、冒頭で示した学習者の誤用例について、従来は「だらけ／まみれ／ずくめ」の中だけにおいて、その使い分け規則の問題が完結していたように思われる。この考え方自体は間違いではないが、本稿の観点から見ると、そもそもとして、「だらけ／まみれ／ずくめ」は特に「評価性」という点において汎用性の低い表現であるということが学習者に十分に伝わっていないという可能性が指摘できる。そのように考えると、まず基本的な表現として「がいっぱい」や「でいっぱい」という文型があり、「だらけ／まみれ」はマイナス評価「ずくめ」は中立的評価かつ特定の名詞にのみ適応される表現であるという関係性を見出すことができるように思われる。このような「がいっぱい」及び「でいっぱい」をバイパスとした「だらけ／まみれ／ずくめ」の導入の仕方に関する方法論の組み立ては今後の課題とする。

〔注〕

- (1) 「いっぱい」と類似する基本的な表現に「たくさん」がある。これについては、「たくさん」についても「いっぱい」と同様に「だらけ／まみれ／ずくめ」との類似性が示唆され、言及する必要のある表現であると認識している。しかしながら、「いっぱい」と「たくさん」を同時に言及することは議論を煩雑にする恐れがあるため、今回は「いっぱい」に絞る。また、「だらけ／まみれ／ずくめ」と類似する表現として「ばかり」があることも認識しているが、上記の理由に加え、「ばかり」は「～るばかり」や「～たばかり」のような助動詞的な用法を持つことを考慮し今回の考察からは外している。
- (2) 具体的には、「駅前／飲み屋で一杯」のような実質的意味を保持している「いっぱい」(27例)や「薄力粉を職場でいっぱいもらう」のような副詞的用法として使われている「いっぱい」(56例)、そして「福岡3回目でいっぱいいっぱい」などの用例(3例)は本稿が分析している「いっぱい」とは用法が異なっているため、目視で除外した。
- (3) 「がいっぱいの」の事例91例のうち、「僕が一杯のジョッキをあける」のように、実質的意味を保持している「いっぱい」の用例が9例確認された他、「水筒がいっぱいするとき」のような「外の関係」として見なければ〈空間〉と〈対象〉の対応関係が分からない用例が22例(21.2%)見られた。また、「でいっぱい」の事例においては、62例のうち「誰も来ないスナックで一杯のオン・ザ・ロック」のように、実質的意味を保持している「いっぱい」の用例が2例確認された他、「そしたら、再検査となり今不安でいっぱいのところですよ。」のような「外の関係」として見なければ〈空間〉と〈対象〉の対応関係が分からない用例が12例(19.4%)観察された。なお、上記に示したように、「がいっぱいの」と「でいっぱい」については、〈空間〉と〈対象〉の対応関係を観察した際、「内の関係」である用例が多数を占めていた。そのため、本稿は便宜上「内の関係」に絞って分析を行った。「外の関係」を取り持つ場合に関しては今後の課題とする。
- (4) 「が」と「で」が「接続助詞」や「接続詞」としての用例を除外するため、品詞を「助詞」の下位分類の「格助詞」と「係助詞」にした。すると、それぞれ2121例と941例となった。
- (5) 本稿では「精一杯」、「お腹いっぱい」、「力いっぱい」のような表現については、①形態的観点として、名詞と「いっぱい」の間の格助詞が脱落している、②意味的観点として、「いっぱい」の中心義からずれている、③構文的観点として、慣用化しているという3つの理由から複合化したものとして判定した。
- (6) 本稿では〈空間〉であるか、それとも〈対象〉であるかは、文脈によって判断したため、1例、2例というように例文単位で数えた方が妥当であるが、〈対象〉を表す語の「評価性」を分析したことに加え、及び例文単位と語単位で数えた場合の結果がほぼ一致していることを

考慮し、最終的に語単位で数えることにした。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（著）（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』白川博之監修 スリーエーネットワーク.
- 太田陽子（2017）「様子・予想・傾向を表す表現」中俣尚己（編）『コーパスからはじまる例文作り』p.67-90, くろしお出版.
- 岡本牧子・氏原庸子（編）（2008）『くらべてわかる日本語表現文型辞典』Jリサーチ出版.
- グループ・ジャマシイ（編著）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 香坂順一・望月八十吉・宮田一郎（著）（1981）『現代日中辞典』（改訂版）光生館.
- 国際交流基金・日本国際教育協会（編）（2002）『日本語能力試験出題基準（改訂版）』, 凡人社.
- 小学館（編）（1981）『国語大辞典』（新装版）小学館.
- 小学館／北京・商務印書館（編）（1987）『日中辞典』（初版）小学館.
- 小学館辞書編集部（編）（2003）『使い方の分かる類語例解辞典』小学館.
- 辛葦（2012）「「まみれ」「だらけ」「ばかり」「ずくめ」的用法区別」『連雲港職業技術学院学報』25（3）：39-41.
- 瀋麗瑛（2004）「“ずくめ”“だらけ”“まみれ”的用法」『日語知識』6：11-12.
- 趙聖花・劉玉琴（2012）「从搭配关系看「だらけ」与「まみれ」的用法」『日語知識』9：18-19.
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（編）（2010）『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』（新装版）アルク出版.
- 日本大辞典刊行会（編）（1976）『日本国語大辞典』小学館.
- 松村明（編）（2006）『大辞林』（第三版）三省堂.

WEB 検索ツール

- 「日本語読解学習支援システム リーディング・チュウ太」
 (<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/>) 最終閲覧日 2023年4月10日
- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言, Ver.2.7.2」
 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>) 最終閲覧日 2023年11月10日

Operational Features of “Ippai”

— Comparing with “Darake/Mamire/Zukume” —

DAI XIAOYAN

University of East Asia • Graduate School of Comprehensive Scientific Research •
Human Sciences
China • Xianyang Normal University
daishouen@hotmail.com

Abstract

The expressions “darake/mamire/zukume” are taught as synonymous expressions at intermediate and advanced levels. They are also commonly tested in the Japanese Language Proficiency Test (JLPT). However, misuse of these expressions by Japanese language learners is often observed, indicating that their differentiation is not straightforward.

This paper proposes the introduction of “darake/mamire/zukume” based on the more basic and elementary level expression “ippai” as a means to address this situation. As a preliminary step, it analyzes the usage of “ippai” through corpus data and compares it with the usage of “darake/mamire/zukume”. The results revealed three main points:

- ① Regarding the relationship between “ippai” and “darake/mamire/zukume”, the latter overlaps with some of the diverse sentence patterns of “ippai”, particularly in cases of “ga ippai” and “de ippai”.
- ② For expressions co-occurring after “ga ippai” and “de ippai”, expressions like “～ ni naru” or “～ no N” are common, which is similar to “darake/mamire/zukume”.
- ③ In terms of “evaluative nature”, while “darake” and “mamire” primarily denote negative connotations and “zukume” implies neutral connotations, both “ga ippai” and “de ippai” can co-occur with nouns that convey positive, negative, or neutral evaluations, indicating their versatility.

These results suggest the possibility of introducing “darake/mamire/zukume” based on “ga ippai” and “de ippai”.

Keywords: Synonymous Expressions, Ippai, Darake, Mamire, Zukume